

宰府画報

第3号

2020年11月
(令和2年)

発行
太宰府市教育委員会
文化財課

調査見聞

さいとうしゅうほ 齋藤秋圃の住まい

手がかりとなった資料

齋藤秋圃は、後妻の富が太宰府天満宮社家の御供屋家の出身であることを縁として、晩年太宰府に隠居しました。その居住地の手がかりとなる文書が太宰府天満宮所蔵史料から見つかったので、ここで紹介します。

それは、天保十四年（一八四三）二月付の「屋敷証文」という文書で、内容は、齋藤周輔・萍哉の二名が、大鳥居家から

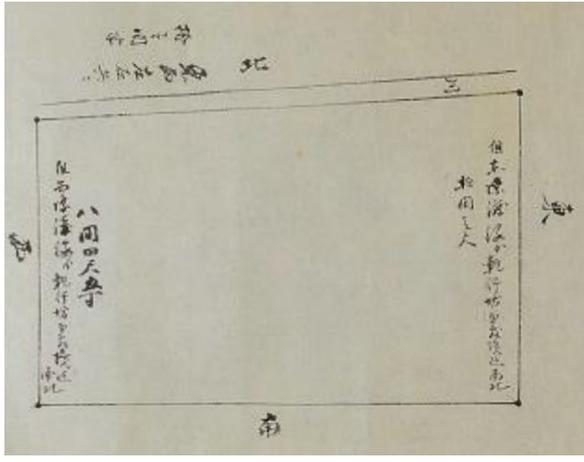


写真1 「屋敷証文」中の絵図



写真2 齋藤家旧宅跡

浦町（馬場の小字）の屋敷地一ヶ所を借用したというものです。「周輔」は秋圃の別表記、「萍哉」は太宰府の地を借用するのから、秋圃とともに署名しているところから、秋圃の跡を継いだ三男梅圃の別名と考えられます。借地料として、年間一俵余りの米を納めるという契約でした。

天満宮の近くで北に川あり

ところで、この文書には東西南北の境界とその距離を示すため、絵図を付記しています（写真1）。この絵図の記載から、借用した土地は、東辺が十間一尺（約十八メー

トル）、西辺が八間四尺五寸（約十六メートル）、北辺が十一間半（約二十一メートル）の横向きの台形の形をしており、北側には川が流れ、南側には太宰府天満宮社家の執行坊の屋敷があったことが分かります。さらに、嘉永二年（一八四九）の文書によれば、その東側の土地も大鳥居家の所有にかかり、その境界に通路を設け、門を建てていたことが知られます。

この辺りであることはたしかか？

ところで、九州国立博物館が開館する際、西鉄太宰府駅からのアクセス道路として整備された「国博通り」の起点は、現在スポーツ公園になっており（写真2）、整備前のこの場所には昭和初期に立てられた齋藤家の旧宅がありました（現在、この建物は東に二十メートルほど移動）。しかし、さきほどの絵図によれば、北側に川が流れていないければならず、条件が合致しません。つまり、この絵図が示す秋圃の借屋は、齋藤家旧宅跡とは異なる場所であったと考えられるのです。

旧宅跡の土地は、明治八年（一八七五）から明治二十一年（一八八八）までの間に、秋圃の孫齋藤文山の所有地になっています。それ以前に秋圃の太宰府の居宅がどこにあったかは、史料がないため、はっきりとは分かりません。

とはいえ、秋圃が晩年をこの近辺で過ごしたことは間違いなく、嘉永五年（一八五二）の太宰府天満宮九百五十年大祭の折には、「萬画奉納」の画講・屏風講を企てたり、東帯天神像を描いたり、太宰府天満宮との深い関係を示しています。（朱雀信城・太宰府市公文書館）

メイシヨ メイブツ

かんぜんおんじ 観世音寺

大宰府政庁の東側約五百mに位置する、言わずと知れた名刹です。七世紀後半に、天智天皇が母帝斉明天皇の冥福を祈るために発願しました。古代には、大宰府の庇護のもと、西海道随一の寺院として繁栄します。境内にある宝蔵には、その寺格にふさわしく、古くは平安時代に造像された巨大な仏像がいくつも安置されています。また、同寺に伝わる梵鐘は、日本最古のものとされ、国宝に指定されています。

古くから太宰府の地に存在する観世音寺は、太宰府の絵師の絵画にもよく登場します。例えば、齋藤秋圃筆《博多太宰府図屏風》のうち太宰府図は、太宰府の関屋から太宰府天満宮への参詣の道程を描いており、その中には観世音寺の姿も見られます（下写真）。また、吉嗣家の梅仙の絵画と拜山の漢詩により、太宰府の古物・名勝を十二ずつ紹介する《太宰府廿四詠》では、観世音寺の古梵鐘が太宰府を代表する古物のひとつとして取り上げられています。（日野綾子・九州歴史資料館）



齋藤秋圃筆《博多太宰府図屏風》部分
個人蔵（写真提供：九州歴史資料館）

逸品探訪

太宰府の絵師に関連する逸品・名品を紹介します

萱島秀峰

【孔雀鳳凰図】

繁栄と安寧の象徴

嘉穂郡桂川町に所在する浄土真宗本願寺派の寺院、長明寺の本堂に設えられた襖絵です。内陣と外陣（※1）とを区切る位置にそれぞれ四面ずつ、向かって右側に百花の王と称される牡丹と孔雀、左側には梧桐（※2）の木にとまる鳳凰が描かれています。鳳凰は中国の伝説の霊鳥で、世が平らかな時にのみ姿を現すとされ、梧桐の実しか食べないということから、絵画ではこのようにセットで描かれます。どちらも繁栄と安寧を象徴する画題です。

萱島秀峰

萱島家は、齋藤家、吉嗣家とともに太宰府で絵師をなりわいとした家系で、秀峰（一九〇一〜七三）は、初代鶴栖、二代秀山の後を継ぎ、実質的な三代目として大正から昭和にかけて活躍しました。太宰府天満宮の文書館で幾度も画会を催したほか、全国規模の南画展に作品を出品したり、福岡市や太宰府近郊の寺社の依頼による襖絵や仏画な



紙本着色・襖装 各面縦 239 × 106 cm 昭和 13 年 (1938) 長明寺蔵

どの大作も遺っています。一時期太宰府天満宮の干支絵馬の原画も描いていました。

華麗なる大作

近年なされた洗浄と修復によって、さっぱりとした感じも受

けますが、モチーフには細部まで丁寧な顔料が施され、よく見ると花や鳥の羽に金泥で筋を描き入れたり、**盛上彩色**（※3）の技法が用いられているのもわかります。制作当初は今よりももっと**絢爛豪華**な襖だったことが窺えます。縦二・四メートル、横四枚をつなげた横幅は四メートルを超す大きな画面ですが、構図は安定しており、筆づかいも丁寧で、まるで極楽浄土を連想させるような堂々とした作品に仕上がっています。

秀峰三十七歳の作。現在確認されている彼の作品の中で最も大きな作品であり、代表作のひとつに位置づけられる優品です。（井形栄子・元熊本県立美術館）

【キーワード】

- ※1 内陣・外陣 寺院や神社で、本尊や神体が祀られている所を内陣、人々が拝礼するところを外陣という。
- ※2 梧桐 夏に黄白色の小花が咲くアオギリ科の落葉高木。たんすなどに用いられるコマノハグサ科の桐とは別。
- ※3 盛上彩色 胡粉（貝殻から作った白色顔料）などを厚く塗った上に彩色を施すこと。立体感や質感をあらわす。

いちまい

【千歳図】



紙本着色 / 47.0 × 34.0 cm

齋藤家資料

「どうとうたり」という祝歌が始まる能の演目「翁」。その前半に舞われるのが「千歳」、後半に演じられるのが「三番叟」です。鈴を振りながら飄逸に飛び跳ねる仕草が特徴ですが、本図は片足立ちで腰をかかめた演者の動きの瞬間をとらえています。剣先烏帽子に黒刷一面、松鶴模様の直垂上下といった装束描写は的確で、抑揚のある描線と明るい彩色が洒落な趣を醸し出しています。

齋藤家資料には能楽関連のものが一群あって、裏面になぞり書きの痕跡があるものがあります。秋圃ゆかりの秋月に隣接する、三奈木の品照寺には、「松窓」印を持つ、本図とよく似た「三番叟図」があり、秋圃の図様が手本として継承されたとも想像できます。

天下泰平と長寿を祈る三番叟の図が、秋圃芸術の伝承に一役買っているのは、まさに得たりといえます。（小林知美・筑紫女学院大学）

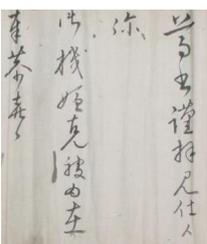
ひとこと くずし字

【拝】

今回ご紹介するのは「拝」という字。詩書画の作品を多く残した吉嗣拝山の名前の一字でもあるため、資料調査で見かけることの多い文字です。画像右側は「拜」という文字で、「拝」の旧字体です。手偏がそのまま手になつているのが特徴で、現在はあまり使用されませんが、吉嗣拝山が活躍した明治時代は一般的に用いられ、拝山と書かれた資料の多くに見ることが出来ます。また、「拜」という字は現在でも手紙や



吉嗣拝山筆《絶筆》部分
吉嗣家資料



《書状》部分
齋藤家資料

「拝」という字は、形が変わつても、今も昔も丁寧な表現には欠かせない文字です。作品や文書を見ることがあればこの文字があるかどうか探してみてください。（木村純也・文化財課）